

# ラテンアメリカ研究者の グローバル対応

星野 妙子

## ●私のメキシコ研究

私は一九八一年にアジア経済研究所に入所した。以来、研究所でメキシコを担当している。特に詳しいのはメキシコ経済、なかでも企業家や企業の動向だ。メキシコの低開発の問題を経済の担い手である企業家と企業の特質から考えるというスタンスで研究を行ってきた。企業に研究の焦点を当て始めたのは、一九八四年からメキシコへ二年間派遣された時だ。メキシコでは地場の大手ビジネスグループへの聞き取り調査を行った。メキシコ滞在中に新聞や雑誌でよく目にしたのがカルロス・スリムという新興企業家の名前だ。私のビジネスグループ・リストにはない名前だった。当時は対外債務危機の混乱期。経営不振に陥った企業を安値で買いたたき、高値で売って利ざやを稼ぐハゲタカ企業

家、といった書きぶりだった。そのスリムが一九九〇年に民営化の

目玉、政府の独占電話会社テルメックスを落札した。二〇〇〇年代には中南米の電話会社の買収に乗り出した。そして買収により資産を増やすことにフォーブス誌の大富豪番付の順位を上げ、二〇〇九年にはついに世界一の座に上り詰めた。この三〇年は無名の企業家を世界の富豪に押し上げるほどのメキシコ経済の大変動期に当たる。担い手に着目する途上国研究者にとって、メキシコは汲めども尽きぬ思索のたねを生み出す豊穡のフィールドだった。

## ●グローバル化と ラテンアメリカ研究

メキシコ経済の大変動をもたらしたのは、国境の壁を突き崩すグローバル化の圧倒的な力だった。

そしてこの力は研究を隔てる国境の壁も突き崩しつつある。

一昔前、苦勞して研究論文を書いても読むのは三人ぐらい、しかもそのうち一人はレフェリーだ、と冗談交じりでよく言われたものだ。それでも書く理由は、いい研究ならば残り、後世に誰かが読んでくれるとの暗黙の前提があったからだ。研究は先人が築き上げた知見の山に新しい何かを付け加える営為だ。その山は、一昔前までは言葉と国境の壁に守られている。しかしインターネットが普及し、研究情報が国境を越えて飛び交うようになり、読者数も引用件数という形で立ちどころに把握できるようなになると、暗黙の前提も説得力を減じた。研究対象の企業のみならずいまや研究者もグローバル競争にさらされる時代となった。しかしそれはラテンアメリカ

研究者にとって、悪いことばかりではないと私は思っている。

地域研究は国益に敏感な学問だ。日本から遠いラテンアメリカは日本の国益とも縁遠かった。そのため日本のラテンアメリカ研究は歴史が浅く、研究者の数も少ない。研究蓄積も研究者の層も厚いアジアとは雲泥の差だ。そのような環境のなかで研究テーマの深堀を続けると、だんだん対話の相手を見つけないことが難しくなる。

この辺の事情はアジア以外の地域研究も同じかもしれない。このような状況におかれた研究にとって、グローバル化は対話の相手を増やす効用を持つのではないかと私はみている。

## ●グローバル化の効用

私があるようなグローバル化の効用を感じたのは、ひとつにアジア研究者と対話ができるようになった時だ。メキシコ企業の活動がもつばら国境の内側に限定されていた時代は、私の関心も国境の内側にばかり向かい、アジア研究者との対話の必要を感じることはあまりなかった。しかしメキシコ企業の活動が国境を越え、アジア企業と競争するようになると、ア

アジア研究者と共有できる問題関心の幅が広がり、対話するインセンティブは格段に増した。私はアジア研究者との対話を通して多くのことを学ばせてもらっている。

グローバル化のもうひとつの効用は、外国語発信により国外の研究者との対話の可能性が開けることだ。外国語で論文を書くのは手間暇かかり苦労するが、さすがに世界は広く、日本にはいない同じようなテーマを深掘りする研究者がどこかに居るものだ。彼あるいは彼女と対話できた時は苦労が報われた気がする。外国語発信は時代の趨勢とはいえ、特にラテンアメリカ研究者の場合、日本国内に対話の相手が乏しいだけに、対話の相手をつつけるといふ意味でも、重要だと思う。

### ●世界の同業者と

#### 何で勝負するのか

研究にはオリジナリティが要求される。それでは世界の同業者と対話するときに、何をもちつて自分のオリジナリティとすればいいのだろうか。

研究テーマにより事情は多々あるが、私の場合は日本の研究コミュニティのなかで体得した研究

対象へのアプローチの仕方や解釈がオリジナリティの源となつてきたと考えている。それは、異なる表現の仕方でも二人のメキシコ人研究者から指摘されたことでもある。

一人からは、私が日本人であることが、企業の聞き取り調査を容易にしていると指摘された。彼は、メキシコ企業はメキシコ人研究者に対しては容易に聞き取り調査に応じてくれないという。もともと聞き取り調査は粘り強く交渉しないと、応じてもらえないものだ。企業へのアプローチの仕方や聞き取りに際しての作法は日本で学んだ。日本人ファクターのなかにそれも含めるならば、彼の指摘は的を得ていると思う。

別の一人は、メキシコのビジネスグループについての私の論文に対し、書評で、日本の財閥研究の成果を取り入れて分析している点を独自の視点として評価してくれた。私は途上国のビジネスグループ研究に日本の財閥研究は大いに役立つと考え、意識的に参考にしてきたので、それを正しく読み取り評価してもらえて、大変うれしかった。

私は一九七〇年代に研究者修行を始めた古い世代の研究者だ。そ

れもあつて世界の同業者と対話する際に、オリジナリティの源をもつばら国境の壁に守られていた時代に蓄積された知見の山に求めた。それはメキシコ企業が海外事業に打つて出るときに、国内の事業活動で培った能力を競争優位の源泉とするのに似ている。

しかしそのような方法がいつまで有効なのか、正直なところよく判らない。それは二つの理由から、日本の知見のあり方が、変わろうとしているためだ。

### ●暗中模索の

#### ラテンアメリカ研究

日本の知見のあり方が変わろうとしている。そう考える理由のひとつは日本の学界で進みつつある内なるグローバル化だ。学界の一角たるアジア経済研究所も外国人研究者、国外での学位取得者がゆつくりと、しかし確実にふえていく。国境の壁に守られていた時代に蓄積された知見も、元をたせば欧米に蓄積された知見であつたかもしれない。しかし少なくとも日本人の解釈というフィルターがあり、オリジナリティの源をこのフィルター部分に求めることができた。それがフィルター抜きで

新たな知見が蓄積される条件が生まれつつある。フィルターを欠いた知見の蓄積が地域研究のオリジナリティの源となりえるのか。その答はまだ出ていない。

もうひとつの理由は、グローバル対応に加え、少子化の進展で、知見を蓄積する場である大学が疲弊しつつあるようにみえるためだ。ある大学の先生に「ラテンアメリカ研究は構造不況業種ですね」と軽口をたたいたら、「いいえ。私は絶滅危惧種と呼んでいません」という笑えない応えが返つてきた。大学が疲弊すれば、オリジナリティの源どころか、ラテンアメリカ研究のように若く、研究者の数も少ない学問は研究者の再生産すらおぼつかなくなる。

次なるオリジナリティの源を何に求めるか。絶滅危惧種のラテンアメリカ研究者が種の保存のために何をなすべきか。暗中模索の最中だ。

(ほしの たえこ／アジア経済研究所 ラテンアメリカ研究グループ)